



JWU 子育てサイエンス・ラボが発行するニュースレター「ゆりのき」は子育てにまつわる様々なトピックやお気軽に参加できる「子育てサイエンス・カフェ」のご案内を掲載しています。以前の「ゆりのき」も[公式HP](#)で閲覧できます

===== 第7回子育てサイエンス・カフェ報告 (5月11日実施) =====

「子どもが外遊びしやすい住宅地を考える」

新しくなったキャンパスに大勢の学生が行き交う賑やかな目白キャンパス生活が始まって1か月が経ちました。今回は、初めて対面でも開催する子育てサイエンス・カフェ。学内者是对面で、学外の方にはオンラインで、合計31名の方にご参加いただきました。昼休中30分という短い時間でしたが、スライドで国内外の町の様子をご紹介しながら、子どもが外遊びできる住宅地のつくりをテーマに、私がこれまでにに行った調査をもとに、幾つかの事例と提案をご紹介しました。

ユニセフ・イノチェンティ研究所の「イノチェンティ レポートカード 16 子どもたちに影響する世界先進国の子どもの幸福度を形作るものは何か」が2020年9月に発行され、日本人の子供の身体的健康は38か国中1位なのに対して、精神的幸福度は37位とのことは示されています。同レポート内では、外遊びする環境が十分にある地域の子どもは、幸福度の高いと述べています。つまり、子供が気軽に外遊びできる住宅地を創ることが、今の日本にはとても大事なのです。

子供の外遊びのためには公園は作られますが、必ずしも計画的に配置できるわけではありませんし、計画的に作っても予定通り使われないとか、作りすぎて管理が大変になることも。ですから、公園だけではなく、身近な生活道路も過ごしやすい環境にすることが大事だと考え、研究をしています。

欧州では、ボンエルフ、ホームゾーンといった名称で、車道でも立ち話や子供が遊ぶことを積極的に認め、車両は十分に注意して通行するような交通ルールがあります。オランダ発祥で、交通事故が多く発生していたことを受けて全国的な交通安全対応組織が対応したことで実現したルールだそうです。

交通ルールだけでなく、道のデザイン自体を人が優先、生活の場である、といった雰囲気になっている町もあります。私が今までに見てきた道で最も気に入っているのは、デンマークのコペンハーゲンにあるKartoffel R ækkerne団地。道にピクニックベンチやら遊具が置いてあります。

こういった取り組みは、住民が子供たちをしっかりと見守る気持ちがあるから実現します。実はかつてある住宅地で行った調査では、住宅のつくりによって、近隣の人の挨拶の頻度が異なるという結果が出ました。家の前の道の様子がわかるような作りをすることで、子供たちを見守ることができ、安心して道で過ごせるコミュニティになります。住宅地内の道を生活の場にする気持ちを多くの人を持ち、その重要性を皆が共通認識することで、生活の場としての利用を積極的に認める交通ルールができるのではないかと期待しています。そしてそれが、子供の精神的な健康を向上させることに結びつけられるでしょう。

会場からは、地方都市の農村部の子どもが外遊びする機会が少ない地域があるという調査結果への驚きの声や、地域コミュニティ内の人の繋がり的重要性が社会福祉の視点とも共通するといった意見が出され、昼休み時間をフルに使って、短い時間でも内容の濃い交流ができました。

(住居学科 葉袋奈美子)



当日の会場の様子



発表スライドより (Kartoffel R ækkerne 団地)

=====**次回の子育てサイエンス・カフェは!**=====

第8回子育てサイエンス・カフェ「心理実験から探る子どもの認知世界」

講師：人間社会学部心理学科准教授 伊村知子

概要：スマートフォンやタブレットの普及とともに、AR（拡張現実技術）を使ったアプリに親しむ機会が増えていますが、心身の成熟の過程にある子どもたちは、AR表現をどのように感じているのでしょうか？

AR表現をめぐる子どもたちの反応から、子どもに特有の認知世界の一端をご紹介します。

ぜひ、ご参加ください！

●開催日：2022年7月開催！（現在、日程調整中！）

日程は決まり次第、本学HPや子育て会員の皆様へ毎月発行しているメルマガにてお送りいたします。

会員登録にご関心がある方は<[本学HP](#)>または右のQRコードより概要をご確認ください！



=====**子育て関連 卒論紹介**=====

「幼児を持つ母親を対象とした対児罪悪感の概念分析」

（2021年度心理学科卒業生 加藤結梨 指導教員：麦谷綾子）

例えば、寒い日にうっかり上着を持たせなかった、登園前に爪を切り忘れた、子どもが話しているのに上の空だったなど、育児のさまざまな場面で、「子どもに悪いことをしてしまったな…」と罪悪感を持つことがあります。この卒論は、育児の中で母親が子どもに対して感じる罪悪感（対児罪悪感）の構造を、心理学的な手法を使ったアンケート調査で明らかにしたものです。

調査では、3～5歳の子どもを持つ母親計200名に、子どもへの罪悪感が起こりうる44の項目（例：感情にまかせて怒ってしまった時、後になって申し訳なく思う）を、実際の子育てでどの程度経験しているのかを回答してもらいました。その回答データを因子分析という手法で解析した結果、母親が子どもに対して持つ罪悪感は5つの要素を含んでいることが示されました。

具体的には、①理想の子育てと現実とのギャップから自分に対するふがいなさを感じる「理想とのギャップによる無力感・劣等感」、②子どもと関わる中で自分が不用意に取った言動を後になって悔やむ「屈折的後悔」、③子どもの気持ちよりも自分の都合を優先した際に生じる「利己的な行動・感情による後ろめたさ」、④自分自身に課した親としての役割や責任を十分果たせていないと感じる「親としての自己規範からの逸脱」、⑤「きょうだいとの扱いの違い」が、母親の子どもに対する罪悪感を構成する因子として抽出されたのです。

子育てを経験している方であればどれも覚えのある感情かもしれませんが、アンケートにもとづいた客観的なデータをもとに、母親の対児罪悪感の構造を明らかにすることができました。今後は、父親が子どもに対して持つ罪悪感との違いや文化差といったものも視野に入れた研究の展開につながればと思っています。

母親の対児罪悪感

遊びたがっているのに、面倒で相手にしなかった…。（利己的な行動・感情による後ろめたさ）

正しい子育てができてない気がする…。（理想とのギャップによる無力感・劣等感）

親がそばにいたのに、けがをさせちゃった…。（親としての自己規範からの逸脱）

あんなに怒らなくてもよかったな…。（屈折的後悔）

つい、他のきょうだいを優先してしまう…。（きょうだいとの扱いの違い）

